

1980年、銀座にあった故・洲之内徹さんの現代画廊で初個展を開いた時のこと。パリから帰国中であつた画家の田中スナオさんが会場に入ってきた。目と目がパチンと響き合い一瞬にして意気投合。翌年の6月、彼を頼りにパリに向けて旅立った。

古く優美なマレ地区にあるアパルトマンの部屋を1カ月間借りた。6階まで螺旋階段を上がりその上階。床は伝統的な六角亀甲型のタイル。傾斜した天井には頑丈な梁が並び、漆喰で塗られた壁に小さな明かり取りの窓がある。映画や本で思い描いていた屋根裏部屋そのものであつた。

窓から見える建造物の連なりは、綿々として人々の暮らしを支えてきた歴史を色濃く映す。中庭からは、

囲まれた石壁に子供たちの声が反射してエコーが掛かり、言葉の音楽のように窓から入ってきた。

毎日のようにスナオさんと昼過ぎに会い、未知なる何かを求めてほつつき歩く。疲れるとビストロに入り、白ワインで喉を潤しタバコを一服。また歩き、次々と現れる初めての光景に

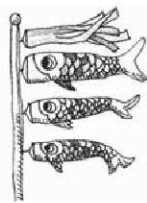
パリ追想1981 I

カルチャーショックを受けながら日は傾いてゆく。夕食はグルメのスナオさんが選ぶ食堂へ。赤ワインを開け、舌鼓を打ちながら満足胃の腑に落とし、夜風に

あたってもう一軒。こんな日を繰り返しながら、初めて見る石造りの家並みや異国の人々の一挙一動を飽くことなく眺め、灰

色の町が醸し出す匂いにすっかり魅せられていった。大人の街、ここには近代の成熟があつた。

ポンピドゥーセンターには何回も行った。常設の部屋には、入るなり好きなアンリ・ルソーの絵がドンとあり、企画展は、関心のあ



ったニコラ・ド・スタールの大展開会中で、何度も見つけた。厚塗りの絵の具のせめぎ合いから画家の切迫度がヒタヒタと伝わり、晩年薄

塗りとなるにつれ、最後に自殺したことがよくわかる気がした。絵を描く強さと辛さが僕をえぐり、いつも

へトへトになった。そんなとき、館の横に再現されているブランクーシのアトリエに入ると、豊かでぬくもりのある彫刻が心の安定をもたらしてくれた。前の広場は大勢の大道芸人と取り巻く人々であふれ、皆芸達者であり活気に満ちてはいるが、表舞台に立て

ない悲哀も見え隠れした。日も暮れると、娼婦たちがズラリと並ぶサンドニの通りを歩いた。善悪美醜などで括れない彼女たちに退廃は感じず、むしろ毅然とし、稀なる平等をも身に付けた存在に見えた。彫刻家のジャコメッティは言っている。「もし自分が女であれば娼婦になる」と。

毎夜女たちは客を待ち、ごまかしもなく、あからさまに立ち続けるのだ。

(吉田 淳治・画家)